

寂庵の台所で

瀬尾 まなほ

寂庵の勝手口を開けると、瀬戸内寂庵先生が椅子に座っている姿が見えたような気がして「先生！」と叫びたくなつたある夏の終わり。

私は今も先生の生前と変わらず、著作権の管理等の仕事を続けさせてもらっている。今でもお世話になつた編集者の方とやりとりをし、先生に関する仕事が出来ていることがありがたいと思う。

先生が亡くなつた直後、先生のいない寂庵に通うことがとてつもなく辛かつた。行くたびに先生の不在を感じ、息が出来なくて苦しくなつた。

二〇二一年一月に先生は九九年という長い生涯を終えた。最期を見届けた私は、その三カ月後に次男をこの世に

迎えた。

先生がいたら産後数カ月で仕事に復帰しただろう。その時の私には一年間の育児休暇を取得することが、寂庵に毎日行かなくてもいい、れっきとした理由になつたのだ。

そのときからもうすぐ四年が経とうとしている。

育児をしていると、あつというまに日々が過ぎていき、子どもたちは成長し、赤ちゃんだつた長男は来年少生になる。なんてこと！

先生の寝室や他の部屋は整理され片付けられているが、台所はそのままにしてある。だから、先生がそこに座っている様子が鮮明で、存在を探してしまう。

夏になれば、「暑い、暑い！」と言いながら頭にタオル

を巻き執筆に励んでいた姿。アイスクリームや冷たいビールの摂取が急激に増えること。暑いと冷房の温度を下げ、しばらくすると冷えずぎたと暖房に変更していて、「暑っ!」と私たちが部屋に入って何度も驚いたこと。

先生のことを思い出すと昨日のことのように感じるのに、存在はもう遠い人になってしまった。先生がいないこの世界が日常で、時々一緒にいた日々が幻のように感じってしまう。

今年のお盆は毎年きてくださる、先生の兄弟子の杉谷御門主を迎え、馴染みの働いていた元スタッフも集まることが出来た。私以外の三名は何十年も先生に仕えてきたベテランスタッフたちで、最後の最期まで先生を支えてきた人たちである。

「いつまでこうして寂庵に来られるだろうか」「七回忌まで生きているかな」と話しているのを聞いて、二二歳だった私がもうすぐ四〇歳になるのだから他のスタッフも年を重ねていて当然だとはっとした。心は変わっていないくとも、時は着実に流れていく。亡くなったと誰かの訃報を聞くことも多し。

定められた命の中、先生を想ってこうして集まれること

がありがたいな、とつくづく感じたこの夏であった。

嫌なことがあったとき、腹が立ったときなど、一人で寂庵の庭に向かつて叫ぶことがある。空っぽの先生の寝室で「先生、どこにいるの? ねえ、先生!」と大声で探したこともある。耳の遠い先生のために出来る限りの大きな声で叫んでも、返事もなし、現れてはくれない。時々、幽霊でも怪奇現象でもなんでも構わないから先生の存在を感じたいとずっと思っているのに、全くその気配さえもない。

以前のようにとても悲しい、という感情はなくなった。過去にしがみついているつもりもない。それでも先生のことを考えない日はない。がんばんなきゃなって、先生のことをいつも意識している(その自分分の不甲斐なさに落ち込むことも多いけど)。

少しずつ、私が前進していつているのを感じている。